



とろ蜜熟女喫茶

未亡人・人妻・女社長

庵乃音人

挿絵／まひるの影郎

立ち読み版

第一章	天にも昇る筆下ろしの夜……………	4
第二章	四十路マダムのセックス指南……………	52
第三章	女社長の性欲解放セックス……………	103
第四章	未亡人のおいしすぎるおっぱい……………	152
第五章	すぐそこに誰かがいると思うと……………	186
第六章	未亡人とオレの淫らな公開セックス……………	240
エピソード	いつも一緒……………	284



登場人物

Characters

飯塚 祐平 (いいづか ゆうへい)

喫茶ボンでアルバイトする明るく優しい大学二年生の青年。美樹に好意をよせている。

藤倉 美樹 (ふじくら みき)

清楚で生真面目な三十二歳の未亡人。喫茶ボンを切り盛りするママで、その温かい人柄と美貌に引かれた客で店を満員にさせている。

上条 友紀子 (かみじょう ゆきこ)

喫茶ボンでパートとして働く三十八歳の主婦。明るく人懐こい性格で、祐平に対して小悪魔的に迫ることも。メリハリのあるモデル体型の持ち主。

田野神 冬子 (たのがみ ふゆこ)

上品で母性的な主婦。四十歳の子持ちとは思えない肉感的な身体付きをしている。喫茶ボンの常連で友紀子と仲が良い。

早乙女 珠緒 (さおとめ たまお)

三十歳半ばにして衣料雑貨店の社長を務める女実業家。大きな熟尻が艶めかしいグラマラスボディの持ち主。

第一章 天にも昇る筆下ろしの夜

カラン、カラン――。

「いらつしやいませ！」

心地いい音を響かせてドアチャイムが鳴る。

カウンターにいた飯塚祐平いづかゆうへいは、明るい声で客を迎えた。

時は八月、夏真っ盛り。入ってきたワイシャツ姿のサラリーマンが、「おお、涼しい」と嬉しそうに表情を弛める。

「あら、いらつしやいませ。お一人？ どうぞ……」

一緒に働く上条友紀子かみじょうゆきこが、頭髮の薄い中年男をにこやかな笑顔で奥のテーブルにいざなう。近くの会社勤めにいるらしい常連なので友紀子も客も打ち解けた態度だ。

「Aランチね。あれ、ママは？」

「残念でした。ランチタイムが一段落したので、ちょっと外に出てまーす」

「あー、残念」

意味深な友紀子の流し目を受け止め、会社員が笑ってごまかす。

そんな二人のやりとりに営業スマイルで参加しつつ、目隠し代わりの暖簾のれんを掻き分けてカウンターの裏の厨房に入る。

畳二畳分あるかないかという狭い空間に、業務用のシンクや調理台、冷蔵庫やガスレンジがスタンバイしていた。棚にはさまざまな食器類が揃い、多彩な調理用具も、「さあ、どんな注文でも来やがれ!」とばかりに並んでいる。

「あら、いいわよ。私がやる。塚チンはあとで飲み物よろしくね。アイスティだって」客のオーダーを取った友紀子が厨房に入ってきた。

ちなみに今日のAランチは、ママ特製のシーフードカレーに具だくさんの野菜スープ。サラダの小鉢と杏仁豆腐のデザートに、ドリンクまで付いている。

「でも……てか、塚チンて呼び方やめてくださいよ」

「どうしてよ。いいじゃない塚チンなんだから。ほら、いいから休んでて。それにしても凄かったわね、今日も。お客さんのほとんどは美樹みきさん目当てなんだろうけど」ウフフ、と色っぽく微笑みながら、調理台に立ってランチの用意を始めようとする友紀子。そんな人妻に場所を譲ると、祐平は冷蔵庫を開けて、バイトに入る前にコンビニで買ってきた烏龍茶のボトルを取り出す。

「……塚チンって、ほんとに真面目ね。買い置きのお水飲んでもいいって、美樹さん

に言われてるでしょ？」

ペットボトルをラッパ飲みすると、祐平をからかって友紀子が笑った。

「公私混同は、やっぱりよくないです」

冷えた液体が食道を下りて胃に収まっていくのを感じ、一息つきながら答える。

「公私混同と来たわね。うーん、硬すぎるわよ、少年」

「もう青年です」

口元に柔和な笑みをたたえたまま、友紀子は皿にご飯をよそい、カレールーを盛りつける。祐平は苦笑いをし、もう一度烏龍茶を、ぐびっ。

「硬くて女に悦ばれるのは、ア・ソ・コ・コ・だ・け」

奇襲攻撃でシモネタを振られ、プ——ッと液体をしぶかせた。咄嗟に顔を背け、食べ物のない方角に噴き出した自分を誉めてあげたい。

「げほっ、げほっ。ごほっ。ゆ、友紀子さん」

「あら、風邪？ 流行ってるんですってね。いや〜ね〜」

柳に風のしれっとした表情で祐平の抗議を受け流し、流れるような動作で用意を進める。祐平はなおもゲホゲホと咳きこみ、参ったなあため息をついた。

この人はいつもこうだ。自分の半分ほどの歳だと思ってか、完全に掌でオレを転が

している。いや、ひよつとしたらまともに男として扱われていない可能性もあった。
(どうせ童貞ですよ)

誰もそこまで言っていないのに、自虐モードで拗ねてみる。

でもこんな目移りしやすい職場でそれなりに長いこと働いていられるのは、堅物のチェリーボーイだからなのだと自画自賛して、さすがにちよつと情けなくなった。

——ここは、街一番の繁華街から少し離れたところにある昔ながらの喫茶店。

駅ナカや駅前、ショッピングモールなんぞによく見かけるチェーン店とは違うこうした日の丸喫茶店を、かつては純喫茶などと呼んだこともあったらしい。

大学二年生の祐平がバイトをするこの店の名は「喫茶ボン」。切り盛りするのは、今年三十二歳になる清楚な未亡人、藤倉美樹ふじくらその人だった。

五階建て雑居ビルの一階で営業を続ける小さなお店。テーブル席が三つ、カウンター前の椅子が五つ程度で、どうがんばっても二十人は入らない。

インテリアや調度品は焦げ茶色で統一され、店内に流れる音楽は常にクラシック。天井から吊り下げられた照明も、今どきこんなものどこにも売ってないだろうと思えるような、一昔も二昔も前の無駄にデコラティブなデザインで、居心地のいい店ではあるものの、率直に言えば時代遅れ感漂う昭和レトロな喫茶店だった。

それでも昼時ともなれば、連日近くのサラリーマン連中などで超満員なのは、ひとえにママである美樹の魅力によるものだったろう。

元々は、資産家の跡取り息子である彼女の夫が道楽者の実父から譲り受けた店らしいけれど、三年前に夫が早世してからは、美樹が経営するようになった。

といつても、別に日々の暮らしに困つてのことではない。

夫が遺していったこのビル自体が彼女の資産で、最上階には自宅もある。

しかも、他の階で店や事務所を開いている店子^{たなこ}たちの家賃などあてにしくても生活していける蓄えは充分すぎるほどあるのだと、教えてくれたのは友紀子であつた。
(なんて……それを言うなら友紀子さんだって、働く必要ないだろうに)

ようやく呼吸が元に戻つた祐平は額に滲み出した脂汗を拭いながら、喫茶店の制服姿に装つた美しい人妻を盗み見る。一回り以上も歳の離れた勤務医を夫に持つという三十八歳の美熟女。ウェーブのかかった栗色の髪をいつもポニーテールにしている。ダークグリーンのワンピースに白いエプロン。すらりとした足は、黒いストッキングに彩られている。

くりくりとよく動く吊り目がちの瞳のせいで、歳よりも若く見えた。

だがアンチエイジングに貢献しているはずの瞳には、どこか好色そうな艶めかしさ

も感じられる。そんな男好きのする目元のセクシーさを、人のよさそうなおちよぽ口が緩和して、表情に親しみやすさを与えていた。

（おっと。見ちゃだめだ）

つい友紀子の胸元に視線が行ってしまい、慌てて視線を泳がせる。

何しろモデル並と形容したくなるような肉体なのに、出るところは出て引つ込むところはしっかりと引つ込んでいるのである、なんて真面目くさって説明している余裕は、はつきり言って今の祐平にはなかった。

（ちよっとだけなら……見てもいいか）

自他ともに認める真面目な性格。とはいえそこは、やはり射精盛りのいたって健康な二十歳。気づかれていないのをいいことに、改めて熟女のおっぱいを盗み見る。

柔らかそうに盛りあがる大きな乳房が、制服の胸元を窮屈そうに突きあげていた。

推定サイズ八十四、五センチ、Eカップの美巨乳。ブラジャーをしているはずなのに、ちよっと動くたびにたぶたとこれ見よがしに揺れる。その上、膝丈スカートから覗くむっちり美脚も眼福以外の何ものでもない。

（それに……お尻もこんなにキュッとして）

スカートの布を盛りあげて、完熟臀部がパンパンに膨らんでいた。おっぱいに比べ

たらいくらか小さめな気もしたが、それでも……うん、やっぱり見事なポリウム感。そう。乳房もヒップも、世間一般の尺度で考えたら充分すぎるぐらいダイナミックだし、魅力的なのだ。

それなのに祐平が、どこか奥歯に物の挟まったような言い方をしてしまうのは……。「ごめんなさい。銀行、すごく混んでいて」

清涼感たつぷりの声とともに、その人は暖簾を掻き分けて厨房に姿を現した。

彼女の姿をひと目見た途端、バクンと心臓が跳ね躍る。

「お、お疲れ様です」

祐平は無難な挨拶をし、さりげなく視線を逸らしてボトルをしまった。

彼女こそ、祐平の奥歯に物を挟ませる張本人。無意識の内に、いつも友紀子と比較してしまうこの店のママ、美樹が外回りの仕事から戻ってきたのだ。

「外すごく暑いですよ。お客さんたち、わざわざ来てくれてありがたいわ」

額や首筋を白いハンカチで拭い、美樹は穏やかな笑みを浮かべた。

卵形の小顔にアーモンドのような瞳がよく似合っている。烏の濡れ羽色をした艶髪が背中では波打ち、毛先を躍らせた。

清楚な美貌、とはこの人のためにある言葉だと祐平は思っていた。

しかも品のいい美しさに、どこか静謐な翳りめいたものが感じられるのは「未亡人だから」という先入観のせいだろうか。そのくせ微笑むと、あたり一面に花が咲いたような明るさを醸し出して、そばにいる者を幸せな気分にしてくれる。

「お疲れ様ー、美樹さん。ちょうどよかったかも」

用意の整ったランチのトレイを差して、友紀子が微笑む。

「ありがとう、友紀子さん。奥の席のお客さんでしょ？」

きつと小走りに駆けてきたのだろう。美樹はなおも乱れた息を鎮めながら、私が持つていきますとばかりにトレイに手を伸ばした。

（おおお……）

白い半袖ブラウスに漆黒のジャンパースカートという店の制服姿。ロングスカートの裾から覗く足元は、茶色のソックスと黒革の靴で彩られている。

白い腕の眩しさははつきり言って友紀子以上。柔らかそうな丸みを帯びた前腕の先で、白魚の指が色っぽく動いた。

大きなお尻をプリプリと揺らすや、美樹は器の載ったトレイを持つ。食器からは食欲をそそる、おいしそうな匂いと湯気があがっていた。

友紀子の腕やおっぱい、お尻の盛りあがりには、眼福だったけれど、相手が美樹と

なるとそうはいかない。眼福どころか、**猛毒**に近い強烈さで祐平を浮き足立たせ、そわそわと落ち着かなくさせる。

（美樹さん、今日も綺麗だな……）

心の中でため息をつき、嘆声を零す。バストは推定九十センチのFカップ。スカートを張りつめさせるヒップに至ってはそれ以上あるはずだ。美貌は淑やかで性格も奥ゆかしいのに、ボディの方は男の理性を惑わす凶器そのもの。そのギャップがたまらんのだという客の男たちの意見もよく分かったが、やはり祐平には刺激が強すぎる。なぜならば——美樹こそ彼の、愛しい片想いの相手だから。

美樹を見つめるたびにせつない思いに身を焦がし、持つて行き場のない気持ちを抱えこんだまま、ずっと途方に暮れ続けていたから。おそらくみんなが感じる何倍増しもの強さで、祐平は美樹の魅力をいっぱいに浴びてしまっているのであった。

祐平と美樹の出会いはいは三か月前に遡る。

《いらっしやいませ。お一人様？ 奥へどうぞ》

何気なしに入った時代遅れ感たっぷりの喫茶店。だが美樹の姿をひと目見るなり、雷に打たれた。優しさたっぷりに、けれどどこか寂しげに微笑む楚々とした熟れ顔。しかもよくよく見れば、何だこの凄すぎる肉体は。

出会った瞬間、もう祐平の人生は変わってしまった。

『アルバイト募集』の貼り紙を見て、これぞ天の采配と感激し、やはり二人の出会い
は運命だったのだと勝手に舞い上がった。

だがいざ店のスタッフとして働くようになり、憧れの美熟女と身近で接するようになると、最初の意気込みとは裏腹にどんどん祐平は萎縮し始めた。それほどまでに、親しくなればなるほど美樹の魅力は、ますます神々しい輝きを放ったのである。

「さつきからお待ちかねよ。ママがいないなら少し負けろとか言われるんじゃないかってひやひやしてたの」

そんな祐平の心の葛藤など知る由もない友紀子は、例の客の様子を冗談にして首をすくめた。すると美樹はおかしそうに微笑んで、

「やめてよ、友紀子さんたらもう……あ、お昼休憩まだでしょ？ あとは私がやっておくから今の内に。祐平くんも、ね？」

いきなり視線を向けられ、またもしくんと胸が弾む。

「は、はい……」

思わず伏し目がちになり、ぎくしゃくとうなずいた。美樹はさらに目を細め、「行つてらっしゃい。車に気をつけてね」と愛らしさ満点の笑顔で微笑んだ。

友紀子と二人して後ろ姿を見送る。そばに友紀子がいなかったら、自分の情けなさにため息をついていただろう。彼女の前だと照れ屋は照れ屋なりにもう少し喋ることができるのに、美樹の前ではてんで意気地がない。

本当はもっと快活にいろいろなことを話したいのにとはいつつ、今の彼にはそれすらも夢のまた夢だった。

「じゃあ、ご飯食べに行こうか、塚チン」

丁寧のエプロンを畳みながら、明るい声で友紀子が誘う。

だが「あ、はい」と答えて準備をしようとすると、突然、すすすすすつ——と、これ見よがしなジト目で友紀子が近づいてくる。

「な、なんですか」

二の腕を密着させ、意味ありげな眼差しで見つめる友紀子に仰け反り気味になって聞いた。するとポニーテールの人妻は妖しい笑みを浮かべて、

「……私が聞いてあげてもいいのよ？」

「は？ あ、何を？」

わけが分からず、声を硬くして問い返す。超至近距離で祐平を見たまま、友紀子はさらに色っぽい笑顔になって、二人しかいないのにひそひそ声で囁いた。

「きみのこと……美樹さんがどう思ってるか知りたいんですよ？」

「——ええっ!!」

驚いて思いきり仰け反ってしまう。こんな狭い厨房で、新体操さながらの間抜けなポーズになってしまった自分が恥ずかしい。

「あら、柔らかなのね」

驚いた表情で拍手をされても全然嬉しくなかった。というか、まったくもってそれどころではない。祐平は目を見張って友紀子を見つめ返す。この店で一緒に働くようになって三か月、こんな風に美樹について突っこまれたのは初めてだ。

「ゆ、ゆ……友紀子さん。あ、あの、き、き……き、き、き——」

「キンタマ？」

「あり得ないです」

この状況で、「キンタマ！」なんて叫んでどうする。馬鹿を飛び越して、危ない若者一直線だ。

「き……気づいてたんですか!!」

「ソフフ。黙ってて悪かったけど、実は私……人の心を読むことができるの」

「マジですか!!」

青ざめて友紀子を見る。友紀子の表情は真剣そのもの。とてもからかっているようには見えない。

「友紀子さん。それじゃ……」

「ふむふむ……なるほど。へー、ちなみに今、きみが一番欲しいのは――」

「ちょ!! ま、待って!」

心なんて読まれてはたまらないと、祐平はさらに浮き足立った。

「美樹さんの汚れたパンツね」

いつときでも友紀子の言うことを真に受け、パニックになった自分が恥ずかしい。

「素晴らしい超能力をお持ちのようで」

「あら、ほんとにパンツが欲しかったの? いやん、こいつ変態」

「いや、そうじゃなくて!」

イヤミをイヤミと受け取ってもらえず慌てて突っこむと、友紀子は口に手を当てておかしそうに笑った。ブラフをかまされ、呆気なく本心をカミングアウトしてしまうなんて情けなさすぎる。祐平は思わずため息をついた。

「ずっとごまかしてるつもりだったのなら甘いわよ。女はね、こういうことには思いきり敏感なの。慕われてる当の本人は別かも知れないけど」

からかうように微笑まれ、不覚にも顔が赤く火照った。

「青くなったり赤くなったり、信号みたいな子ね」

「ほっといてください。ああ、恥ずかしい……」

秘め続けたせつない恋心を晒しものにされ、頭を抱えた。そんな祐平にクスリと笑い、「ほんとに力になるわよ、美樹さんのこと」と友紀子が色っぽく囁く。

「その代わり、私も塚チンに頼みがあるの」

いきなり手を伸ばしてきたかと思うと、白魚のような細い指で祐平の顎をスリスリ、スリ。祐平は「おお……」と鳥肌を立て、までも仰け反った。セクシーな潤みを滲ませてネットリ見上げてくる艶瞳に、さらに浮き足立つ。

「た、頼み？」

「うん。あのね……」

目を細めると、爪先立ちになって祐平の耳朶に肉厚朱唇を近づけた。

「今日ね……男が欲しくてたまらないのよ。相手してくれない？」

「……………えっ!!」

目を見張って見つめると、友紀子は熟れた美貌をほんのりと紅潮させ、はにかみながらも、色っぽくウインクをした。

人生というのはつくづく分からない。

バイトに行こうとアパートを出た時には、それから半日後、まさか自分がこんな場所にいることになるなどと夢にも思わなかった。

「前から一度、来てみたいと思っていたのよね。へー、なるほど。素敵じゃない」

だが落ち着きなく立ち尽くす祐平とは反対に、友紀子は喜色満面である。好奇心丸出しの視線を方々に向け、きらきらと瞳を輝かせている。

この街に何軒かあるラブホテルの一つ。しかもここは何か月前にオープンしたばかりで、友紀子たち主婦仲間の間でずっと話題になっていたというのである。

（主婦仲間で……ラブホって）

奥手の祐平には、女そのものが未知の世界。

大学で顔を合わせる同世代の乙女たちさえよく分からないのに、熟女と呼ばれるこんな世代の女性たちのことなんて分かるはずもない。

だがやはり、美しい人妻たちがエッチなホテルについてみんなできやあきやあと盛りあがっているというのは意外だった。

部屋の隅にぼつりと佇んだまま、祐平は落ち着かない視線をあちこちに泳がせる。

ムーディなブルーの照明に浮かび上がる妖しげな部屋。深海をイメージしているのだろう、三方の壁には遊泳する魚たちの姿がCGで映写され、バスルームとの仕切り壁だけが全面鏡張りになっている。

耳を澄ませばブクブクと小さく気泡の音すら聞こえ、天井で回るミラーボールが部屋の雰囲気をつつそう艶めかしいものにしていた。

「ねえ、一緒にお風呂入らない？」

クイーンサイズの大きなベッドが部屋の中央にでんと置かれている。友紀子はその縁に座り、子供のようにマットレスを軋ませて嬉々としていた。

「えっ……あの……」

いきなり誘われ、祐平はさらに面食らう。

「女に恥かせないで。男でしょ」と強引に誘われてこんなところまでついてきてしまったが、この期に及んでも、まだ覚悟を決めかねたままだった。

何しろチェリーボーイなのだ。しかも彼の心は今も美樹のもとにある。

「すみません、ゆ、友紀子さ——」

「ここまで来ておいて、今さら野暮なことは言いつこなしよ、塚チン」

機先を制するように言われた。ベッドから立ち上がり、くなくなど身をくねらせて

近づいてくる。

いつも無駄に色気を振りまいて童貞野郎を惑乱させる熟女ではあったが、これまでのフェロモン責めなど暇潰しの「お遊び」でしかなかったのだと思ひ知らされる。

魅惑の微笑には、ついぞ見たことのない濃厚な色香が滲み出していた。好色そうに瞳が潤み、これ見よがしに出した舌が唇をネットリと舐める。

「ほんとに今日だけだつてば。二度も三度も誘つたりしないわ。それに、美樹さんとのこともちゃんと応援してあげる。してほしいでしょ？」

「それは……あつ」

棒立ちの祐平の前に立つて媚びたように微笑んだかと思うと、胸元に手をやり、じつと青年を見つめたままボタンをはずし始める。

浮き足立った祐平は目を見張り、慌てて友紀子に背中を向けた。

「わ、分かりました。でも、お風呂……オレはいいです。朝、シャワーを……」

不様にも声が上ずってしまふ。背後で友紀子がクスツと笑った。

「じゃあ、一人で入らせてもらうわね」

言うなり突然、後ろから熱っぽくハグをした。不意を突かれ、つい「わわっ！」と奇声を上げて固まる。

「可愛い子。美樹さんさえいなかったら、私のモノにしちゃうのに」

「友紀子さん!! あ……」

熟女の肢体は淫靡な熱を帯びていた。ムギユムギユと柔らかな塊がひしゃげる。

（おっぱいが当たってる。ま、まずい……）

萎びきっていた股間の一物が甘酸っぱく疼く。心臓がトクトクと早鐘のように打ち始めた。落ち着けと言いつつも焼け石に水。背筋と額にジットリと緊張の汗が滲み出す。友紀子はそんな青年の葛藤などお構いなしに、愛おしげに頬ずりをし、

「なんて、うそよ。フフ、そんな困った顔しないの。すぐあがるから待っててね」

耳元で囁くなり、上機嫌でハミングをしながら洗面所に消えた。

冷や汗がドツと噴き出してくる。

（気絶しそう……）

祐平が足元をふらつかせ、大きなため息をつこうとしたその時だった。

部屋の明かりが突然消えて真っ暗になる。代わりに、鏡の壁が明るくなった。何事かと驚いて視線を向けた祐平は、声を上げそうになる。

（ゆ、友紀子さん!!）

いったいどうしたことだろう。一瞬にして壁が透明になったかのように、向こう側

の光景がありありと見えている。

いや、透明になったかのように――ではない。これはもう完全にスケスケだ。

友紀子はこちらに背を向け、洗面台の鏡に向かっていた。髪をアップにまとめ、慣れた手つきでヘアピンをしている。鏡に映った微笑は、ゾクッと来るほど色っぽい。

『フンフン、フン……』

すっかりドアを閉めて入ったはずなのに、相変わらずハミングが聞こえた。しかも彼女のいる場所とは離れた――天井の近くから。

声のする方を見上げた祐平は、小さなスピーカーを発見した。どうやらどこかにあるマイクが友紀子の声を拾って流しているらしい。

(どうしてこんなことが……あつ)

呆気にとられた祐平は、友紀子に目をやってドキッとする。

美熟女は鏡に映る自分を見つめて、ブラウスのボタンをはずし始めた。見ちゃだめだ――祐平は混乱したまま友紀子に背を向ける。

脳裏にふと、マジックミラーという言葉が浮かんだ。もしかしたら、浴室とベツドルームを仕切る壁はそれではないだろうか。

ムーディな間接照明はカモフラージュ。何かのきっかけ……そう、たとえば誰かが

洗面所に入って明かりを点けたら部屋の明かりが消え、マジックミラーの法則そのままに、向こうの光景が見えるようになる仕掛け、とか。

（黙っていて、いいのかな）

後ろめたい気持ちのまま、とくとくと心臓を打ち鳴らした。まさかこんな風に出菌亀されているなんて、友紀子は夢にも思っていないだろう。

そう考え、祐平は息を飲む。夢にも思っていない——つまり今のこの異常事態に、友紀子はこれっぽっちも気づいていないのである！

小市民極まりない小心さの隙間を縫って、いけない欲望がムクムクと鎌首をもたげだす。心臓が脈打つたびに脳味噌や指先が痺れた。口が渴いて口腔粘膜に舌が貼りつきそうになる。それでも祐平はそろそろと、一度は背を向けた眺めに視線を戻した。

（おおお……おおおおお！）

たまらず声を上げそうになり、口を押さえる。

何も知らない友紀子の脱衣は進んで、とつくに下着姿になっていた。祐平はもう目を逸らすこともできず、食い入るように無防備な半裸を見つめてしまう。

コーラのボトルを彷彿させる均整の取れたプロポーション。うっとりするほど色白の艶肌。細い腰から一転して、ポリウム感たっぷり張り出す豊満な臀部がプリプ

リとくねっている。

まごうかたなきモデル体型。それなのに年齢相応に肌が少しだけ張りを失い、熟れきった味わいを醸し出しているのがいかにも「熟女」という感じである。

（何てエロい下着）

思わずぐびつと生唾を飲んだ。布面積の少なすぎるハーフカップのビキニブラとパンティ。どちらもシックな黒色だったけれど、どうやらシースルー素材らしい。

目を凝らせばブラからはうっすらと乳首が、パンティからは尻の割れ目が透けている。ブラの中で重たげに双乳が揺れ、パンティから伸びた太腿が震えた。

祐平はたまらず、股間の一物をムクムクと膨張させる。

『フン、フン……それにしても可愛い子。あんな若くて可愛い子とエッチできるなんて……ゾクゾクしちゃう』

祐平は鼻息を荒らげた。美熟女の眩きが、思いがけない音量ではつきり耳に届く。友紀子は胸元に手をやると、プチッと音を立ててブラのフロントホックをはずした。

ブルルンッ！

ブラの締めつけから解放された熟れ乳が、勢いよくまろび出る。

ユサユサと躍るEカップおっぱいは、二つの円錐が飛び出したような見るからにい

やらしい形をして、しかも成熟の分だけ少し垂れている。乳輪はミルク入り珈琲を思わせるおいしそうな色合い。真ん中で乳首が、早くもつんと尖り勃^たっていた。

（た、たまらない！）

さっきまでの小心さはどこへやら。気がつけばフラフラとマジックミラーの前まで近づき、身を乗り出して友紀子のストリップに見入る。

友紀子は鏡に映る自分を見てボディチェックをしているようだ。右へ左へと上半身をねじり、脇腹の肉を摘んで眉を八の字にする。

『また少し太っちゃったかしら。恥ずかしいわ。でも……』

いきなり色っぽくなくなると身をよじり、両手で生乳をせり上げた。

（おおお、自分でおっぱい揉み出した！）

鏡に手を突いて、友紀子のプライベートな痴態を食い入るように盗み見る。セクシーな黒パンティ一枚の熟女はヒップを揺さぶりながらおっぱいを揉みしだき、

『んん……こっちは、結構イケてるわよね。塚チン、きつと興奮するわ。あ……』

すでにかなり感度が高まっているのだろう。乳首を擦り倒すたびに、熟れた女体が小刻みに痙攣する。美貌の火照りもいつそう増し、瞳が濡れてきらきら光った。

ひとしきり乳をまさぐり終えると、友紀子は、

『やだ、私ったらもう』

と恥ずかしそうに我に返り、紅潮した頬を軽く叩いて最後の一枚を脱ごうとする。

(いよいよだ……)

磁石に吸い寄せられる砂鉄さながらに、豊熟ヒップに目を釘付けにする。シースルのスケパンがパツンパツンに布を突つ張らせて、大きなお尻に食いこんでいた。

友紀子の両手が腰に伸び、パンティの縁にかかる。ハミングをしながら前屈みになったかと思うと、ずるつと尻から三角の布を剥いた。

(ああああ……!)

食べ頃の甘い桃を思わせるまん丸とした双丘が露わになった。お尻の真ん中で濃い影を刻む臀裂にも欲情をそえられる。

友紀子はパンティを脱ぐために身体を二つに折り、下着の輪から片脚ずつ抜く。動きに合わせて乳房がたふたと揺れ、尻の谷間がくぱつと割れた。

臀丘の狭間から秘肛が覗く。胸をドキドキさせて覗きこんだ祐平は、

——えっ。嘘おっ!!)

見間違いいではないかと目を疑った。もう一度しげしげと見るも、やはり間違いない。(す……すこい尻毛!)

皺々の肛門を縁取って、尻毛が豪快に生え茂っていた。

一瞥しただけでは産毛も分らない滑らかな腕やつるんとしたお尻の持ち主が、よもや尻の谷間にこんなにもスケベな毛を密生させていようとは。

それだけでも相当いやらしい眺めだったが、ついに全裸になった友紀子の後ろ姿を目の当たりにすると、よけい悶々と淫らな欲望がこみ上げた。

背中と尻に残った下着の痕も、リアルな女体の生々しさを感じさせる。

『……よしと』

脱いだものを脱衣籠に丁寧を重ねた友紀子は、ついに向きを変えてバスルームに入ろうとした。淫靡な期待に身を焦がしてか、心なし顔の火照りが増している。

（もしかして……アソコの毛も剛毛かな）

はしたない想像によけい胸苦しくなりながら、焦げつくような視線を友紀子の股間に注ぐ。ところが友紀子の肉体は、またも青年の妄想を軽々と裏切り、

（え、ええっ……パイパン!?!）

祐平は驚きの視線を、粘る餅のように恥丘に吸いつかせた。美熟女のヴィーナスの丘は、つるんとしていて一本の毛もない。まるでロリータ娘の持ち物のように、柔らかでふつくらとした肉土手と、縦一条の亀裂が見えるばかりである。

『うーん。やっぱり一人じゃ寂しいわね……』

すると浴室の扉に手をやった友紀子が、動きを止めてぽつりと呟く。思い直したように踵を返すと、再び洗面所のドアに足早に近づいた。

「——っ!! ま、まずい！」

慌てた祐平はマジックミラーの前から離れ、ベッドにダイブする。

「あわわっ……」

「ねえ、塚チン。やっぱり一緒に入らない? ……何してるの?」

ベッドルームに顔だけ出した友紀子が、スプリングを軋ませてベッドの上で跳ね跳る祐平を見て首を傾げた。

「い、いや。別に何も……跳ねてるだけです。あはは、あははは、あは」

なおもしつこく弾むマットレスの上で上へ下へと揺れながら、祐平は作り笑いでごまかす。すると友紀子は媚びた顔つきで悩ましげに身悶えたかと思うと、

「一緒に入ろう。いやだっていうなら……私が裸になるとこっさり見てたこと、美樹さんにばらすわよ」

「——ええっ!!」

祐平は間抜けとしか言いようなない声を上げ、ベッドを軋ませて友紀子を見つめた。

このホテルが彼女たちの間で話題になっていた真の理由を、今ごろになってようやく理解する。強ばった顔が一気に赤くなった。

「あら、意外に逞しいのね」

観念してバスルームに顔を出すと、友紀子はシャワーを浴びているところだった。お湯の雫を滴らせた完熟の裸体は、いっそう豊艶なエロスを醸し出している。乳首を痼り勃たせた乳房も柔らかに震えるヒップも、まるでぎたての果実のよう。

両手で隠した掌の中で、勃起したペニスが甘酸っぱく疼いた。浴室の中にはもうもうと湯気が立ちこめ、乳臭い女体の香りが充満している。

「そ、そんな……別に逞しくは……」

祐平は萎縮する。どちらかといえば小柄で華奢な方だった。

同性の前でも裸身を晒すのは気恥ずかしい。それなのに相手が美しい女性となれば、居心地の悪さはやはり野郎の比ではない。

「やだ。こんなとこまで来て何隠してるの？ 見せなさいよ」

祐平に向き直り、お湯まみれの裸を惜しげもなく晒しながら悪戯っぽく笑う。ちょっと動いたたびに三角錐おっぱいがフルフルと揺れて、目に毒なことこの上ない。

(い、いやらしい……)

股間で怒張がピクンと脈動した。

緊張しているのは嘘ではない。しかし同時に、今まで感じたこともなかったような妖しい昂揚感も、童貞青年の身と心を火照らせ、ときめかせる。

「塚チン、見せなさいってば。ずるいわ、私のことばっかりこっそりジロジロ見て」

「ゆ、友紀子さん。お願いだからそのことはもう……」

「いいから、ほら」

祐平に近づくや手首を掴み、無理やり股間から離される。生まれて初めて異性にちんちんを晒した祐平は、恥ずかしさに身悶えて顔を背けた。

「まあ……」

かたや友紀子は驚いたように息を呑んでいる。何事かと思つてチラッと視線を向けると、青年の手首を掴んだまま唇を半開きにしてじつと股間を見つめたままだ。

「凄い……塚チン、おちんちんこんなに大きかったの!!」

賛嘆の声には歓喜と興奮が入り混じっていた。熟女が食い入るように見下ろす発情勃起は膨らんだ亀頭をヒクヒクさせながら、雄々しく反り返っている。

二十センチ以上はある、まぎれもない巨根。しかも長さだけでなく胴回りも極太で、

さらに言うなら肉傘の張り出し具合も相当なものだ。

「可愛い顔してこんなもの持つてるなんて。塚チンのくせにデカチンだったのね」

「意味分かりません。てか、そんなに見ないで……」

不躰もいいところの好奇の視線に晒され、ますますいたたまれなさが募る。身をよじって一物を隠そうとするものの、祐平の意に反して股間の分身はブルン、ブルンと元氣よくしなり、ますます鈴口の皮を突っ張らせた。

「こんな立派なもの持つてるくせして、何を恥ずかしがってるの、デカチン」

「塚チンです」

「そう呼ばれるのいやだって言ってたじゃない。ちよつと、何でもいいけどいい加減そんなに照れるのやめなさいよ、童貞でもあるまいし」

「え……」

友紀子の突っこみに不意を突かれ、つい固まってしまふ。そんな祐平の反応に、今度は友紀子が「え？」とフリーズした。まじまじと見つめ返されて顔が熱くなる。

「童貞なの!!」

絶滅寸前の希少珍獣でも見るような目つきで聞かれ、答えに窮した。だが答えないことが何より雄弁な返答。友紀子は大喜びして、

「やだ、童貞だったのお？ 美樹さんの前ではともかく、私とは結構気楽そうだったから、てつきり少しは経験あるのかと思ってた。やん、デカチン、童貞なんだ！」

「あの、何でもいいけどデカチン、デカチンって——」

「ああん、デカチン！」

ぴょんぴょんと嬉しそうに飛び上がり、乳も股間も剥き出しで抱きついてくる。

祐平は「うわ！」と身をすくめた。温かくて柔らかかでぬるぬるした女体に抱きしめられ、顔だけでなく身体全体が一気に火照る。

（おおお。おっぱいが当たってる……）

力いっぱい抱きしめられ、生乳がムギムギと胸を圧迫した。

祐平に押し返されて平らにひしゃげる肉房の肌触りは、まるでマシユマロのよう。蕩けるように柔らかで、視覚でも触覚でもオスの野性をビンビン刺激する。

しかも乳首は柔房と裏腹な痼り方。薄い胸板に炭火のような熱を伝える。

「可愛いわ、可愛い可愛い！ デカチン、初めてなのね。塚チンなのね、チェリー」
何を言っているのか相変わらずちんぷんかんぷんだったけれど、とにかくもの凄く感激しているのは間違いない。

「嬉しい。童貞の男の子なんて初めてかも。いいわ、おばさんがいっぱい気持ちよく

して、素敵な思い出作ってあげる」

いきなり「おばさん」と来た。常に手玉に取られてきた気はするけれど、チェリーボーイとばれてもう完全に子供扱い。悔しいが、童貞なのは事実なのだから仕方ない。「ゆ、友紀子さん……」

「もー、知らなかったわぁ。ほら、こっち来なさい。わー、凄い……」

祐平をシャワーの方に引き寄せた友紀子はフックからシャワーヘッドを取ると、萎縮する青年にお湯の飛沫を優しくかけた。最初はさらに身をすくめたものの、ほどよい熱さの湯を浴びて、少しずつ緊張が解ける。

「そう。大人しくしてね。いい子、いい子」

友紀子は嬉しそうに微笑み、振り返った一物にまでシャワーを浴びせると、「はい。むこう向いて」と慣れた手つきで祐平をくるりと反転させる。

今度は背中にお湯をかけられた。何だかとてもいい気分である。

青年の身体を净め終わると、友紀子はフックにシャワーを戻し、お湯を出しっぱなしにした。温かな湯けむりをあげて、バスタブに飛沫が飛びこむ。続いて熟女は、ボディソープのボトルから粘液を取った。てきぱきと泡を立てたかと思うと、

「はい。じゃあ、もつとキレイキレイしよーね」

甘い声で囁き、いきなり後ろから包みこむように祐平を抱きしめる。

（おおおお！ おおおおおつ！）

ソープが塗りたくられたのは、掌だけではなかったらしい。乳もお腹もぬるぬると泡まみれ。その上友紀子がこれ見よがしに身体をくねらせるものだから、ニチャリ、ニチャリと艶めかしい粘着音を立てて、ゼリーののような乳房が背中中に擦れる。

「あの、友紀子、さん……!!」

「気持ちいいでしょ？ 恥ずかしがらなくていいの。女の人にこうされると、気持ちいいって思うようにできてるのよ、男の身体は。それに、あ……私も……」

乳首が食いこむたびに、友紀子はビクン、ビクンと女体を震わせて喘ぎだした。もうこれだけでも、チェリーボーイにはかなりの刺激である。

「あああ……」

友紀子は手を回して、泡だらけのヌルヌル指でペニスを握った。自分以外の指に初めて触られ、祐平は鳥肌を立てる。身を強ばらせて股間を見下ろせば、たっぷりのソープをまとわりつかせた白い指が愛おし^{たかぶ}そうに棹を這う。

祐平は甘酸っぱい昂りを覚えながら、何度も交互に足を踏みしめた。

「そんなに硬くならないの。言ったでしょ？ 硬くて女に悦ばれるのは……」

甘ったるい声で囁くと、ついに友紀子はソフトな手つきでペニスを包んだ。

「コ・コ・だ・け・よ。まあ、硬い……」

ソープを潤滑油にして、白魚のような指が屹立をしごき始める。棹の部分をしごき緩急をつけてしごき、小刻みな快感波を注ぎこむ。

「お、おお……」

想像していた以上に強い刺激を覚え、祐平は呻きながら悶えた。同じような行為は自分の右手でもお馴染みなのに、どうしてこんなに気持ちいいのだろうか。

「感じる？ いいのよ、いっぱい感じて……ほら、もっと気持ちよくしてあげる」

言うなり友紀子は、盛んに棹をしごきあげていた指を、突然亀頭に移した。揉みくちやにされるような包み方でヌチャヌチャと鈴口を揉みこねられ、祐平は引きつった声を上げながらカウパー氏腺液をドロリと漏らす。

（何これ。気持ちよすぎる）

強い快感に身体が痺れ、踏んばっていられなくなった。

足元をふらつかせて目の前のガラス壁に手をつく。それでも友紀子は、なおも身体を密着させたまま亀頭をモミモミとまさぐり続ける。

「おっきい亀頭。私、こんな凄いちゃん初めて見るかも……」

「ゆ、友紀子さん。ああ……」

カリ首をまさぐっていた指が、シュツシュと上下に動き出す。張り出した部分を扶けるように擦って棹を根元まで下り、再び窮屈に締め上げながら先っぽまで移動する。いつもおちやらけている美熟女が初めて見せる、内に秘めた妖しい艶めかしさを目の当たりにする思いだった。匂い立つような濃密色香にゾクツと震えが来る。

「おっきいだけじゃなくて、太くて硬い。それに……こんなに熱くなつて」

しごけばしごくほど淫らな気持ちが高まってくるのか。擦りつける乳房や腹のくねりに艶めかしさが増し、唇から零れる吐息にいつそう甘く熱いものが滲み出す。

ペニスを愛撫する指の筒が狭くなり、より激しい刺激を、カリへ棹へと注ぎこむ。ぐちゅ。ぬちゅぬちゅ。ニチャ、ねちよ……。

「うわ。あ、そこは……」

その上、あろうことか、友紀子はもう一方の手も祐平の股間に伸ばし、キュツと締まった陰囊を鷲掴みにした。牡莖をしごきながらのキンタマ揉み。グニグニとネチツこい動きで皺袋をまさぐられ、性器の感度が何倍にも過敏になる。

（おおお、友紀子さんの指、温かい……それにソープのぬめりも、た、たまらない）
「あん、き、聞こえる？ エッチな音、大きくなってきたわよ……」



ソープがいつそう泡立ちを増すとともに、グチュグチュと鳴るいやらしい水音もさらに高まり、昂奮したらしい友紀子が甘い声で囁く。

「ゆ、友紀子、さん……」

「エッチなキンタマ。可愛い顔して、こんなにチン毛を生やして……」

熱い吐息を吹きかけながら、友紀子はあられもない言葉を囁く。まだ二十年そこそこの人生ではあるものの、綺麗な女の人からこんなにデカチンだのキンタマだの言われるのは初めてである。

「キンタマとか、言わないでください。あ……」

「どうしてよ？ 女の人にスケベなこと言われると、何だか興奮しない？」
悔しいけれどたしかに一理あった。

「私は凄く興奮するの。だってふだんは言えないじゃない？ 澄ました顔して生きてなきやならないんだもの。だからセックスの時は、うんとエッチになっちゃうの」

「んん。感じる……」

友紀子はいけい熱っぽくヌルヌル乳房を背中に擦りつけ、ソープだらけの指で手コキをエスカレートさせた。

もう一方の手はニギニギと、ちよつと強すぎるほどのキンタマ揉み。

陰囊を絞りながらの手コキがこんなに気持ちいいとは知らなかった。ふぐりを握られるたびにペニスが引つ張られ、亀の頭が突つ張る。友紀子はその瞬間を逃さず、的確な指筒ピストンで肉傘の縁を擦りあげた。

性感を剥き出しにした鈴口に痺れるような快感が閃き、脳天に突き抜ける。じわじわと射精感が盛りあがって、どこかふわふわした心地になった。

「だめ。そ、そんなにしたら……精子出ちゃうよ！」

訴える声に、つい媚と恥じらいが滲む。揉まれる皺袋の中でグツグツと精液が煮立ち、屹立の芯が真っ赤に焼けた。

「いっばい出して。デカチンからエッチな精子、びゅーびゅー飛び散るところ、おばさんに見せて！ あはああああ、乳首、感じちゃう……」

巧みに上半身を擦りつけ、痼る乳芽に自ら激感を注ぎこみながらの肉悦奉仕。そんな美熟女のテクニク抜群の陰茎責めに負け、全身が総毛立つ。

キーンと耳鳴りがし、峻烈な快美感が怒濤のうねりとなって高まった。

「友紀子さん、で、出るう！」

「出して！ 射精して！ ああああああ!!」

どびゅどびゅどびゅ！ びゅるる！ どびびびびつ!!

白い閃光弾が炸裂し、視界も意識も白濁した。祐平は天高く弾き飛ばされたような爽快感を覚えながら、吐精の悦びに溺れる。

「まあ、凄い。水鉄砲みたい。こんなに激しく……それに、量も……」

動きを止めた人妻の指の中でドクドクと脈動し、祐平の怒張はあらん限りのザーメン弾を連射する。目の前のガラス壁に、湿った音を立てて白い塊が叩きつけられた。

五回、六回、七回——雄々しい痙攣を繰り返し、獣茎はようやく吐精をやめる。

栗の花を彷彿させる匂いが香り立った。祐平は髪の毛の生え際や胸から汗の玉を噴き出させ、乱れた息を整える。

「凄い……凄いわ！ やっぱ若いっていいわね。こんな逞しい射精、久しぶりに見たかも。この匂い、たまらないの！」

感激したらしい友紀子は祐平から離れると、彼の前に回り込む。吊り目がちの大きな瞳には、見たこともないような発情の潤みがあった。

「あ、あの……」

「今度は私を気持ちよくして。もう……ベッドまで待てない！」

切迫した調子で言うのと、祐平の首に腕を回していきなり口を求める。柔らかな肉厚唇が押しつけられ、ぷにゅとひしゃげた。

「むんう、祐平……」

生温かな息に鼻面を撫でられ、射精したばかりの硬直が甘酸っぱく疼く。友紀子は右へ左へと顔を振り、グイグイと顔を押しつけて口を貪った。

（オ、オレのこと、呼び捨てに……ああ、色っぽい！ アソコに……ジンジン来ちゃう。おおお……それにしても、キスってこんなに気持ちいいもんだったのか）

初体験のキスは、思いがけない悦びを教えてくれた。そんな彼の感激と驚き、心地よさは、接吻がエスカレートすることさらに強いものになる。

友紀子の朱唇からローズピンクの舌が伸び、くねる動きで青年の舌を求めた。

祐平はおずおずと差し出す。するとためらうことなく、唾液混じりの舌が彼の舌先をとらえてちろちろと舐めた。

（き、気持ちいい……これって、ベロチュー!!）

いつしか祐平は思いきり舌を突き出し、美熟女の舌に積極的に絡みつかせる。ピチャピチャと艶めかしい粘着音が響き、戯れ合う舌から唾液が粘り伸びた。

友紀子は端整な美貌を惜しげもなく崩し、鼻の下までいやらしく伸ばして舌を突き出す。左右の頬が挟れるように窪み、濃い影ができた。

獣の情欲を剥き出しにしたそんな人妻の姿に、祐平はいつそう発情する。

「んああ、祐平。もう我慢できない。ここで……私が大人にしてあげる」

熱い吐息を惜しげもなく零すと、全裸の熟女は背後のガラス壁に体重を預け、いきなり何をするかと思えば、

「——っ！ おおおお、な、何て下品なかに股！」

「ああん、ねえ、来て。ほら、ここに……」

腰を落とすと股を開き、相撲取りが四股を踏むような格好になる。

無毛のふつくら秘丘が晒され、腿のつけ根に妖しく咲く牝の華苑が露わになった。

「友紀子、さん……」

「ここよ。ここに亀頭、押しつけて。さあ……」

エロチックな大股開きのまま両手を秘園に伸ばし、指でラビアを広げる。ニチャツと秘めやかな水音が響き、ピンク色の粘膜が菱形に開いた。

（い……いやらしすぎるよ！）

射精をして人心地ついたはずなのに、滾るような欲望は収まるどころかよけい火勢を強める。ちつとも萎びようとしない勃起を手に取り、友紀子の花芯を凝視した。

ふつくらこんもりの大陰唇は、少しくすんだ珈琲色をしている。ピンクのビラビラは小さめに思えた。発情して思いきりべろんとめくれ返ってこそいるものの、咲いて

いる花は思いのほか可憐で、恥ずかしげな趣さえ感じさせる。

やはり秘毛は、自分で処理をしているようだ。つるつるしたヴィーナスの丘には、よく見れば剃り跡の粒々があった。

「こ、これが……女の人の……オマ○コ」

「そうよ。オマ○コよ……興奮するでしょ？ さあ、祐平、早く」

オスの情痴を誘う甘い声。くぱっと華苑を広げた友紀子は、がに股ポーズでくねくねと腰を振る。

「そんなこと、されちゃったら……オ、オレもう！」

祐平は駄々っ子のように身体を揺さぶって全裸の熟女に詰めよった。

ほら、ここよ、ここ、と切迫した吐息混じりに言いながら、友紀子はさらに横長に牝粘膜を開いて、しゃくる動きで尻を前後に振りたくる。

あまりのいやらしさに息苦しさが増し、全身の毛穴が開いた。祐平は先っぽからなおもドクドクと精液を垂れ流す肉棒を手に取り、媚肉に押しつけようとするものの、

「アン、違うわ……いやん、違うってばあ……」

悲しいかな、チェリーボーイには性器をドッキングさせることすら至難の業。当てずっぽうで挿入しようとしても、亀頭はズルッ、ズルッと陰阜に擦れるばかりだ。

「ど、どこ？ 入らない……」

恥を忍んで訴える。プライドなんてとつくの昔に捨てていた。とにかく早く魅惑の牝園にペニスを突き刺したくて、他のことは何も考えられない。

「慌てないの。ほら……」

そんな祐平に母性本能をくすぐられたのか。友紀子はクスツと笑い、彼の顔を見つめたままそつと勃起を手につめた。

身をくねらせて手を動かすと、過敏さを増した鈴口がヌルヌルして温かなものになり密着する。二人は一緒に身体を震わせた。友紀子の朱唇から、甘い吐息とともに「ア……」というセクシーな声が零れる。

「ゆ、友紀子さん」

「腰を突き出して。ゆつくりと。私の顔を見ながらよ。さあ……」

早くしてと煽るように、亀頭の先を包みこんだまま牝ビラがひくついた。

はつきり言って、童貞には猛毒すぎる強烈な刺激。しかもたった今射精したばかりの肉亀は、性感をひりつかせたままである。

口の中いっぱいに苺を噛みしめたような甘酸っぱさが広がり、歯茎が疼いた。それでも牝の本能に導かれてぎくしゃくと腰を突き出すと、

「あああああ！」

突然ペニスが、ぬめつとして窮屈極まりない粘膜の狭間に飛びこむ。

「うわ。わ、わわ。何、これ……」

うろたえた祐平は間拔けな声を上げ、口元を引きつらせた。

これはもう何と言ったらいいいのか、とにかくとんでもない激感。たとえるなら、煮込んだトマトにぷすりと陰茎を埋めこんだらこんな感じではあるまいか。

驚くほど温かで、粘つくような甘い果汁に溢れている。その上この肉トマトはそれ自体が単独の、艶めかしい生命体のよう。鈴口におもねるように波打って絞り上げ、トマトの粒々を彷彿させる微細な突起で甘締めを繰り返す。

「だ、だ、だ、だめ……これ何なの。あ、ああ……精子、すぐ出ちゃう！」

ゾクゾクと背筋を駆け上がる、悪寒にも似た官能のさざ波をどうにもできない。信じられない気持ちよさに目を白黒させ、懸命に尻の穴を窄めて友紀子に訴える。

「我慢して。男の子でしょ。もっと奥まで全部入れて。私を見ながら。あ……」

弱気な子供を叱咤する母親のような口調で言うと、友紀子は潤んだ瞳で祐平を見た。この世のものならぬ快感を覚えているのは、どうやら自分だけではないらしい。

「恥ずかしいよ。やだ、顔見ないで。ああ……」

恥じらいながらも、なおも自然に腰が前に出る。ぬぷつ、ぬぷぬぷつとはしたない水音がして、極太の男根がさらに奥まで埋まっていく。

「あ……可愛いわ、祐平。気持ちよさそう。やん、可愛い顔……私のオマ○コで、こんなに気持ちよくなってくれてるのね。あ、あ……」

屹立が深く刺されば刺さるほど、友紀子はせつなげになくなると身をよじり、背筋をたわめ、よけい瞳を妖しく濡らしながら、熱い吐息を祐平の顔に吹きかける。

（嘘だろう。オマ○コって、こんなに気持ちいいものなの!!）

薄桃色の淫壺に根元近くまで肉楔を打ちこんだ祐平は、総毛立つ身体を持てあまして、何度も両脚を踏みしめる。分身だけが異世界にからめとられたようなこの感覚は、生まれて初めて覚える奇妙な、けれど驚くほど心地いいものだった。

「友紀子さん、すごく……温かい」

超至近距離で見つめあいながら、甘えた声で感想を口にする。

「そうよ。温かいの。びっくりしたでしょ？ ほら、動いて……」

熟れきった女体は、さらに強い快楽を求めていた。だが祐平は、

「そ、そんなことしたら……すぐ射精しちゃう」

と真剣に戸惑う。そんな青年の髪を友紀子は両手でクシャクシャにした。

「だめ。我慢しなさい。男なら、女の人も悦ばせなきや……さあ」

やっていることは、大人同士の営み、以外の何ものでもないのに、友紀子との関係はいつの間にか、母親と子供、みたいになりつつある。

しかし何だか、それも無性にいい感じ。祐平は友紀子を見つめたまま歯を食いしぱり、おもむろにペニスを抜き差しし始めた。

ニチャ、ぐちよ。ヌッチョン……

「ああ……」

友紀子は色っぽい喘ぎ声を零して肢体をくねらせる。肉傘が膣壁と擦れたのだろう。目の眩みそうな快感の火花が散り、一気に精液が尿道をせり上がりそうになる。

「わわっ。うわ、うわ。だめ、気持ちよすぎるよう。腰……抜けちゃう……」

「そうよ。気持ちいいの。それが女の人のオマ○コ。これが……セックスなの」
言うなり身をくねらせ、自ら腰を振って膣壁をペニスに擦りつける。

「うわああ。待って。き、気持ちいい。精子出ちゃう！」

「我慢我慢。お尻の穴キュってなさい。アン……うふうん……」

がに股ポーズで陰茎を呑みこんだ友紀子は、下品もいいところのしゃくり方でカクン、カクンと腰をくねらせる。閃く快感がいつそう強さと甘酸っぱさを増し、祐平

を蕩けるような生殖天国へと引きずりこむ。

「気持ちいい。大人って……みんなこんな気持ちいいことしてるの？」

ぬめる肉筒でにゅぽん、にゅぽんと勃起をしごかれ、骨までフニャフニャになりそうな恥悦に襲われた。友紀子は「あふう……」とセクシーな喘ぎを漏らし、

「そうよ。みんなしてるの。子供に隠れてコソコソと、チンポとマ○コ、こんな風に擦りつけ合って、気持ちいいことしてるの。んん……」

「た、たまらない……」

窮屈な粘膜を傘の出っ張りでヌチョヌチョと擦りながら、オスの猛りが蜜洞を出たり入ったりする。童貞小僧の夢想なんてあつさりと凌駕する麻薬のような恍惚感が膨張し、もっと強い電撃に酔い痴れたくなる。

祐平は痺れた両脚を必死に踏んばり、友紀子と動きを合わせて腰を振った。

「あ。ああ……そうよ。凄い……そう、そう……あフウ」

「うわあ、最高、すぎる……」

二人して前へ後ろへと尻ピストン。ズボズボ、グチョグチョという汁音も高らかに、発情性器が擦れ、戯れ、おもねりあう。

「凄い。オマ○コ、どんどんエッチな汁が溢れてくる」

抽送を繰り返せば繰り返すほど、牝褌はじわじわと濃厚な歡喜汁を分泌させ、ペニスの抽送をさらに快適にした。

「出ちゃうの。私も気持ちいいから。汁……エッチな汁、いっぱい出ちゃう！」

鼓膜を溶かすような甘ったるい声を上げ、友紀子は熱っぽい動作で祐平を掻き抱く。気持ちよくなりすぎて、もう腰を動かすこともできないらしい。

浴室にはなおもシャワーの音がうるさく響いているというのに、今となつては媚肉の立てる粘着音の方が大音量なほど。しかも肉傘に掻き出された牝シロップが糸を引いて粘り伸び、ビチャビチャと爆ぜ音を立てて滴り落ちる。

「もっと動いて。そうよ、そう。突いて。いっぱい突いて。ああ、気持ちいい！」

「友紀子、さん……」

「気持ちいいの。祐平のデカチン気持ちいい。ああ……」

（いやらしい。もう出ちゃう！）

祐平は熟女の裸身を抱き返し、鼻息を荒らげて腰を振った。

やはりオレも一匹のオスなのだと思ひ知らされる激情抽送。自ら怒張を抜き差しし

て女性を責めることに、少しずつ猛々しい悦びを覚え出す。

グヂュルグヂュル。ぬちよぬちよ。ズボズボ、グチョ……。

「いいン、祐平。ああ、いいわ。蕩けちゃう。おばさん、蕩けちゃう。おおう」

「友紀子さん。エッチな声」

獣の響きを色濃くした美熟女のよがり声に、よけい淫らな気持ちにさせられた。

決壊寸前の男根を尻の穴を窄めて堰き止め、牝華の奥深くまで貫いては襞を搔き毟って亀頭を抜く。

「おおん、吠えちゃうの。祐平が可愛くて。祐平のデカチン凄くよくって、吠えちゃう！ いっぱい吠えちゃう。はああおッ……んんんうつつ……」

「ああ、もうだめ……」

渾身の力で腰を振れば、バツン、バツンと生々しい爆ぜ音を立てて友紀子の恥丘とぶつかり、カリ首が子宮餅を挟り抜く。今にも爆発しそうな、煮え滾る快感。怒濤の連打を送りこむと、ついに精液が陰囊からペニスにせり上がる。

「イク、き、気持ちいい！」

「ああん、祐平！ あああオオオオ……つつ！ んんあああああつ!!」

どぴゅぴゅ！ どぴゅどぴゅどぴゅぴゅ！

恍惚の雷が祐平を貫く。青年はピンと両脚を伸ばし、熟女の身体を肉棹一本で中空に突き上げかねない馬鹿力とともに、肉亀の先から濃密ザーメンを迸らせる。

ぞんきよ

蹲踞姿の全裸妻はガラス壁をずり上がり、爪先立ちになって痙攣した。

どうやら一緒にアクメに突き抜けたらしい。どんな顔をしてイッたのか見てみたかったけれど、力いっぱい抱きすくめられているため、願いは叶わなかった。

「あ、あん……イッチャッ、た……やだ。ビクビクしちゃって……止まらない……」
祐平の精子を腹の底に受け止めながら、うっとりしきった甘い声で喘ぐ。

ドロドロになった牝壺が、もつと出してとせがむように怒張に吸いついた。射精中のピンク亀は、そんな媚肉の刺激にもうたまらない。さらに雄々しく脈打ってどびゅどびゅと精液弾を撃ちまくり、人妻の子宮をたっぷりの精液で満たしていく。

「き、気持ちいい。これが……セックス」

頭の中に靄がかかったような酩酊感を覚えつつ、祐平は吐精の悦びに溺れた。

「そうよ。これがセックス……おめでとう、祐平。もう、大人よ」

薄桃色に火照りきった美貌が、ようやく首筋から離れて祐平を見る。

「ありがとう。友紀子さん……」

祐平はもう一度、熱っぽく美熟女を抱きしめた。

知ってはならない気持ちよさを、知ってしまった気がした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>